

## 人たらしの要素

2023・9・27 重枝 一郎

今年度になって、校長講話・保護者会・学院月報等で話した内容である。ましてや今年度4月から様々な場所での講演を20か所以上してきたが、この話をすることが多い。1学期末にある学年の学年集会で話した内容もこの話を軸にしている。

昨年度、福岡女学院大学キャリアセンター・アドバイザーミーティングに参加した時のことである。テーマは「選ばれる大学とキャリア教育」であった。意見交流もあり、その中でも「企業が求めるキャリア教育」については私もいろいろ質問をした。

アドバイザーの方々は、九州ビジネス協議会、経済産業省、データサイエンス関係、会社代表など今の社会への感度が高い方々だと話を聞いていて思った。

その中で、「今求められる人材」という話になった。そこで出た2つのワードが、1つは「柔軟性」、もう一つが「人たらし要素」であった。

1つ目の「柔軟性」については、「受け入れる力がないと、たし算にならない」ということであった。これは、イノベーションには、人とつながる力が必要であり、それも、**異質な人とのつながり・連携によるたし算がとて重要**だからということであった。

この考えは、私自身も、これまでもいろんな場面で発信していたことであり、あらためてその大切さを確認できた。私自身の著書「teacher's teacher2」では、次のように書いた（本校図書館に置いている）。『今、学校や教師に求められているのは、“異質とつながる力”である。学校と社会、教室と家庭、教科と教科、学校と学校、教師と生徒、生徒と生徒・・・実はすべて異質と言うべきである。そして、異質なもの同士の境界に、新しい教育を開く活力の源がある。だから、職場体験、社会人講話、家庭訪問、研究授業、小中連絡会、面談等をしている。つながるためには、心理的な壁を越えて近づかなければならない。新しい場所、新しい出会いを求めて扉をたたき、学び合い、認め合う関係をつくらなければならない』。

2つ目の「人たらし要素」というのはどういうことだろうと思った。

一般的に「人たらし」とは、「人をたぶらかせる人」「だます人」というネガティブな意味で捉えられていると思う。ところが最近では、「嫌悪感のない人」「バランス感覚がいい人」「コミュニケーションが上手」などポジティブな解釈をされることが多くなったそうである。

経産省の方が多くの会社の人事担当と話す中で、この「人たらし」という才能をとても評価しているという話であった。人事担当が言うには「人たらしである以上、対面している人を不快な気分させることは皆無です。その才能たるや本能レベルとしか言いようがないと思うときがある。相手からすると、その人から嫌なことをされない、言われないと信用される」。

なるほど、確かに、一緒に仕事をしたくない人は、全くその反対だと思った。仕事は一人ではやっていけない。だから「人たらしの要素」はたし算をつくりやすい。

ちょっと「人たらし」を想像してみる・・・

「人たらしはいつも穏やかなので安心して話しやすい」「忙しくても手を止めてあいさつしてくれる」「冗談を言えばいつも朗らかに笑ってくれる」「押しつけがましいところがない」「どう思う？とさりげなく声をかけてくれる」「オープンな性格で、接していて気持ちがいい」「心に垣根をつくらない」「弱みを見せてくれる」「失敗を笑い飛ばす快活さがある」「また一緒に仕事をしたいと思う」・・・これは本校の先生方の姿である。